

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：37104

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12148

研究課題名（和文）医療専門分野のスキルアップにつなぐ多職種連携技術教育の探究

研究課題名（英文）Exploring interprofessional technical education that leads to skills improvement in the medical specialty field

研究代表者

森本 紀巳子（MORIMOTO, Kimiko）

久留米大学・医学部・教授

研究者番号：80268953

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：看護師や介護士、言語聴覚士などが、患者に食事援助をする場合、各職種の専門性を活かしながらも、患者に対しては職種の専門性が統合され、どの職種であっても同じ技術が提供される必要がある。本研究は、食事援助時の視覚情報に着目し、眼球運動測定装置を用いて実施時の視線の動きと言動を分析し、各職種の共通、強み、弱み、そして援助技術の課題を明らかにすることである。2022年度には、本実験の方法を検討するために、被験者4名が食事援助する時の視覚情報と言動を測定した。今回、眼球運動測定装置で口腔内までの視線の動きを測定することが難しく、測定方法の検討が課題となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多職種連携をシステムの構築や多職種理解ではなく、医療技術者としてその専門性を活かす技術の連携として考え、技術の連携がひとりの療養者・患者の生活行動のひとつに統合されたケアにつなぐことを連携の効果とする点である。

本研究では多職種の専門性が具現化され、共通の場面を通して具体的に理解できることから、連携の具体化につながる。そして、専門職同士の強みや弱みと役割を理解した上でスキルアップし、個人への統合された援助技術・ケアに反映される。また、IPEへの新たな示唆が得られると考えている。

研究成果の概要（英文）：When nurses, caregivers, speech pathologists, and the like provide meal assistance to patients, their specialties are integrated with the patient while making use of the specialties of each occupation. However, for one patient, the same technology needs to be provided regardless of the occupation.

The purpose of this study is to focus on visual information during meal assistance, analyze gaze movement and behavior during implementation using an eye movement measuring device, and examine the common strengths and weaknesses of each occupation, as well as assistive technology. In 2022, in order to examine the method of this experiment, we measured the visual information and behavior of four subjects when helping them eat. This time, it was difficult to measure eye movement up to the oral cavity with an eye movement measurement device, and the study of the measurement method became an issue.

研究分野：基礎看護学

キーワード：食事援助 看護技術 多職種連携

1. 研究開始当初の背景

超高齢化社会に突入した日本は、「病院完結型医療」から「地域完結型医療」へと転化している。その中で、介護の課題、地域・在宅医療への取り組み、医療費削減といった課題が生じており、多職種連携「質の高いケアを提供するために、異なった専門的背景をもち専門職が、共有した目標に向けて働く」は必要不可欠なものとなった。

多職種連携の教育は Inter Professional Education=IPE と呼ばれて開始されているが、これまでの多職種連携に関する研究は、他職種の理解や連携システムの構築の内容が多い。また、訪問看護場面で多職種が集まるケア会議の報告も多い。しかし、一人の療養者・患者の生活の一部の行為に対して看護師がどのように看護実践しているか、そして介護士や言語聴覚士がそれをどのように繋ぎ深めるか、もしくは言語聴覚士の実践内容を看護師や介護士がどのように繋ぎ深めているかなど具体的実践内容の連携に関する報告は少ない。

看護職者の実践内容においては、医療依存度の高い在宅療養者が増加する現在、訪問看護師の看護ケアは医療的処置が中心となり、看護師による食事介助や食事指導は十分とは言えない状況にある。「平成 22 年国民生活基礎調査」の介護内容の実施状況を見ると、一日 3 回の食事の準備・後始末・食事介助には、家族の介護者が 50～70% 関わり、看護師の実施が少ない傾向にある¹⁾。特に訪問時に摂食・嚥下機能障害の状況を直接観察しない看護者もあり、摂食・嚥下障害レベルのアセスメントの不十分さを指摘し、かつ適切な援助技術・指導技術を獲得する必要性も報告されている²⁾。

研究者は、在宅で療養する神経難病患者の摂食・嚥下機能を看護師がアセスメントできる判断指標の作成を目指して、簡易で安全な定量的接触・嚥下機能の測定方法を検討してきた³⁾⁴⁾。その調査においても多職種、特に看護師、介護士、言語聴覚士によるケア会議はされていたが、直接の食事介助は家族が行っていた。療養者の一日 3 回の食事行動が成立している背景には、家族介護者の気遣い、優しさ、創意工夫があり、家族は「食事介助が一番負担だ」と訴えていた。このように多職種が関わっていても、看護師、介護士、言語聴覚士らの介入が効果的になされていない現状があり、患者の心理的問題や家族の負担は軽減できていない。また、研究者らが保健師、看護師、介護士を対象に“言語聴覚士による嚥下訓練演習”を行った際、訪問看護師から「嚥下の理解ができ、看護師にもできることがあった。療養者の嚥下訓練に取り入れている」の連絡を受けた。このことから共通の援助技術を介して多職種が理解する必要性を確認した。

以上のことから、これからの多職種連携は、それぞれの医療技術職者の技術の専門性を引き出し合い、援助技術がひとりの療養者・患者の生活行動の一つ一つに統合された形となる必要があると考えられる。

そこで、本研究では、多職種が関わることが多い食事援助場面を通して、専門分野の関わり方を詳細に分析し、その専門分野の強み、弱み、連携の中の見落としなどを明らかにし、食事援助が多職種の専門性の統合された形に近づくために示唆を得たいと考える。

2. 研究の目的

多職種が関わっていても療養者・患者とその家族にその効果がなかなか反映されていない現状がある。そこで、もっと実践的・具体的な援助場面である技術の連携に着目すれば、専門職同士の技術の強みと役割を活かした連携となり、個人への統合されたケアにつながるのではないかと考えた。今回は、多職種が関わる食事援助場面における各専門分野の観察技術を分析し、一つのケアの専門性の強み、弱み、観察不足と連携不足を具現化すること、そのうえで個人への統合されたケアにつなぐ技術連携教育を探る。

3. 研究の方法

今回、本実験に向けて方法を検討している準備段階の内容を報告する。(1)口腔内への視線の測定は可能か、(2)用いる事例、食材、測定環境などを検討することとした。

被験者

臨床看護師 2 名、訪問看護師 1 名、介護士 1 名とした。以降臨床看護師を A と B、訪問看護師を D、介護士 D と呼称して示す。

方法

被験者がゴーグル型の眼球運動測定装置 Talk Eye Lite (T.K.K2950 : 竹井機器株式会社) を装着して模擬患者に対する食事援助を実施し、その時の被験者の視線の動きと言動を測定、録画・録音した。また、実施後に被験者の実施時の思いを得た。実施の様子を録画した。



T.K.K2950

実施状況

実施は“上肢が不自由な患者”への食事介助場面とし、患者は椅子に座っている。食材は、形態が異なる食物(おにぎり、ヨーグルト、お茶)を準備して、他におしぼり、箸、小スプーン、コップも準備し、被験者がこれらを持っていきテーブルに置いた。測定時間は、被験者が食事を

持っていく患者に挨拶をする時点からの5分間を目安にした。

分析内容

眼球運動測定装置による視線の動きの注視部位・注視時間および言動、実施時の思いを検討した。実施時の視線の動きの検出範囲は、左右50度、上20度、下40度、サンプリング周波数は30Hz、デフォルト値5deg/seとし、0.1秒以上の注視をデータとした。(図1)

なお、被験者と模擬患者役には、研究の意義・目的・方法等を説明し、同意書により承諾を得て実施した。実施においては新型コロナウイルス感染症の感染予防対策を厳守して実施した。



図1 測定時の視線の動き * ○ 囲み部分

4. 研究成果

被験者の実施時間は、臨床看護師AとBが5分間実施、Cが4分24秒、Dが4分11秒でCとDは5分間前に終了した。なお、今回、臨床看護師Bの眼球運動測定装置による較正のずれのため注視部位・時間のデータを除外した。(図2)

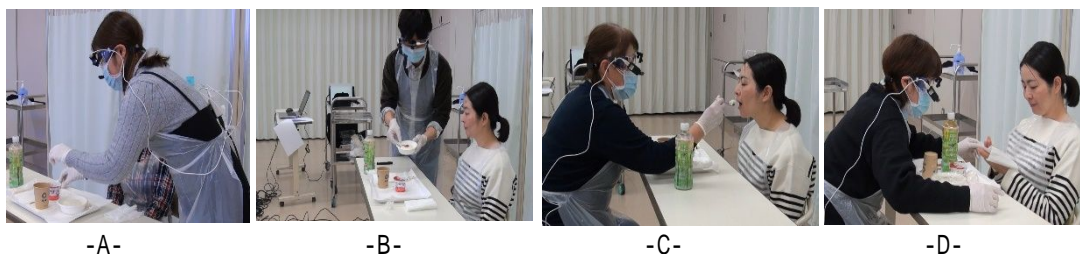


図2 被験者の食事援助測定状況

(1)注視部位と時間

A、C、Dの注視部位で、患者に目線を置くときは「目」「額」「鼻」「口」が多く、被験者が食材を操作するときには自分の手元の「おにぎり」「ヨーグルト」「茶」「コップ」「箸」「スプーン」「おしぼり」を注視していた。「咽頭」や「口腔内」への視線や注視は確認できなかった。注視時間は、Aは15.6秒、Cは20.8秒、Dは4.9秒であった。介護士Dが最も短かった。

(2)注視時の言動

援助姿勢は、臨床看護師AとBは患者の左右斜め側に立って援助し、訪問看護師Cと介護士Dは患者の正面から実施していた。

発語数は、Aが20、Bが23、Cが10、Dが23で、実施時間と注視時間が短かった介護士Dが短い時間内に多くの声かけをしていた。訪問看護師Cの場合は、注視時間は多かったが発語は少なかった。4名に共通していた発語内容は「どれから先に食べますか」「次にどれを食べますか」「お茶を飲みましょうか・飲みますか」「もう少し食べますか」であった。さらにAとBは「飲み込みましたか」「〇〇を入れます」の発語があり、Aは「大丈夫ですか」と声かけしていた。また、CとDは「おいしいですか」、Dは「一口はどのくらい、これくらいでいいですか」と話しかけていた。臨床看護師AとBは患者の嚥下の確認があり、訪問看護師Cと介護士Dには食事の味などの会話があり、発言内容に違う傾向があることが推測された。

(3)実施時の思い

実施時の思いとしてAは「食べる時は口元、嚥下の時は咽頭、咀嚼の動きを観た。一口一口をきちんと飲み込んでいるか、飲水はむせがないかを特に注意した。どちらから援助するか考えて左から右へ移動した。」と記述していた。Bは「初めての患者なので患者の自立度が判断できなかった。立ったまま援助は後半疲れた。日頃スプーンを使用して介助していたので、ごはんもスプーンを使った。」、Cは「一口量を少なめにした。食べた後に水分と交互に食べて頂き、飲み込みを確認して次へとした」、Dは「相手の目線に合わせて介助した。日頃は右側からしている。緊張してうまく声かけできなかった。」と記述していた。

(4)今後の課題

被験者の食事援助動作は患者との距離が非常に近く、ゴーグル型の眼球運動測定装置を用いた口腔内の観察を示す視線の動きの測定は、難しかった。更なる機器の調整や他の機器の使用

など検討が必要である。また、口腔内の観察技術の分析は、まずは、口腔内の静止画面を用いて視覚情報を測定するなど、段階的に進める方法も視野に入れて進めることも考え、事例や食材も更なる調整が必要である。

<引用文献>

- 1) 秋本さおり、古村紀代：食事摂取への関わりについてのチームアプローチの実態調查看護師と言語聴覚士の関係性に着目して、埼玉県包括的リハビリテーション研究会誌、3、6-9、2013
- 2) 岡本富士子、岩永美由紀：入院患者の食事環境に関するケアの実態調査、日本看護学会第 32 回看護総合、172-174、2003
- 3) 森本紀巳子、野村志保子、谷脇考恭：嚥下機能障害患者の摂食・嚥下機能レベルの判定指標と測定方法-健常者の摂食・嚥下機能測定結果からの検討-、久留米医学会誌、75、42-53、2012
- 4) 森本紀巳子、野村志保子、谷脇考恭：嚥下機能障害患者の摂食・嚥下機能の測定方法と判定指標の検討-神経難病患者と健常者の摂食・嚥下機能測定による比較検討-久留米医学会誌、77、45-56、2014

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加悦 美恵 (KAETSU Mie) (80330869)	久留米大学・医学部・准教授 (37104)	
研究分担者	高橋 梢子 (TAKAHASHI Shoko) (90453240)	島根県立大学・看護栄養学部・准教授 (25201)	
研究分担者	中山 麻由 (NAKAYAMA Mayu) (30713218)	久留米大学・医学部・助教 (37104)	
研究分担者	宮本 いずみ (MIYAMOTO Izumi) (80587064)	久留米大学・医学部・助教 (37104)	
研究分担者	三次 貴大 (MIYOSHI Takahiro) (80785866)	久留米大学・医学部・助教 (37104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------